〔三代實錄四十陽成〕元慶六年五月二日癸卯、大和國司言、管高市郡從五位下天川俣神社樹、有鳥巢、產得四雛、其一雛毛色純白、

〔抹桑略記二十四醍醐裏書〕延長三年三月廿七日、山城國獻白烏、外記勘申先例、

〔金葉和歌集九雜〕後冷泉院の御時、近江國より白き烏を奉りたりけるを、かくして人にも見せさせ給はざりければ、女房たちゆかしがり申ければ、をの〳〵歌よみて奉れ、さてよくよみたらん人に見せんと、おほせ事ありければつかうまつれる、　少將內侍

たぐひなくよにおもしろき烏なればゆかしからすと誰か思はん

〔百練抄十後鳥羽〕文治二年七月十七日壬辰、大外記師尙令勘申白烏例、去比白烏出來云々、

〔甲子夜話四〕天明ノ末カ、京師ノ近鄙ヨリ白烏ヲ獲テ朝庭ニ獻ジタルコトアリ、ミナ人祥瑞ト云ケル、然ニ翌年京都大火シ、禁闕モ炎上ス、其後松平信濃守ニ御書院番頭、モト豐後岡侯中川久貞ノ子、此家ニ義子トナル、會シテ聞タルハ、曰某ガ實家中川ノ領內ニテハ、タマ〳〵白烏ヲ觀ルコト有レバ、輕卒ヲ使テコレヲ逐索メ、烏銃ヲ以テ遂ニ打殺スコトナリ、其ユヘハ白烏ハ城枯ノ兆トテ、其名ヲ忌テ然リ、野俗ノナラハシ也ト云テ笑タリシカ、

烏事蹟

〔日本書紀二神代〕天稚彥之妻下照姬、哭泣悲哀聲達于天、是時天國玉聞其哭聲、則知夫天稚彥已死、乃遣疾風、擧尸致天、便造喪屋而殯之、卽以川鴈爲持傾頭者及持帚者、烏爲尖人者、一云、(中略)以

〔古事記中神武〕故神倭伊波禮毘古命、從其地廻幸到熊野村之時、大熊髮○髮蓋誤字出入卽失、○中略於是亦高木大神之命以覺白之、天神御子、自此於奥方莫使入幸、荒神甚多、今自天遣八咫烏、故其八咫烏引道從其立後應幸行、故隨其敎覺、從其八咫烏之後幸行者、到吉野河之河尻、

〔古事記上序〕神倭天皇經歷于秋津島、○中略大烏導於吉野、

〔釋日本紀七述義〕延喜公望私記云、于時戶部藤卿進曰、嘗聞或說八咫烏者、凡讀咫爲阿多者、手之義